

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 9 集

丸 山 遺 跡

宮崎県営農村基盤総合整備パイロット事業
送水管埋設工事に伴う調査報告

1990・3

宮崎県・西都市教育委員会

序

西都市は、宮崎県のはば中央に位置した内陸都市で、300余基の西都原古墳群をはじめとする、多くの古代遺跡が各所に点在しています。

西都原古墳群は、千数百年の長い年月を大自然の中に、今も古代の夢とロマンを秘めて眠りつづけますが、我々は先祖が守り続けてきたと同様に、子孫に語りつぎ継承しなければならないと思います。

本年度発掘調査を実施しました丸山遺跡は、西都原古墳群と同一台地上に在り、この地に農家所得の向上を図るため、送水管の埋設工事が施行されることになりました。

この県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴い、西都市教育委員会が、宮崎県一つ瀬土地改良事務所長の調査委託を受けて事前調査を実施しました。

調査の結果、遺跡及び遺物が出土しましたが、遺物の大半は縄文土器片で、この地域に古墳文化の栄えた以前から人間が居住したことを説明しています。

この報告書は、本調査の調査記録ですが、今後の調査や研究を含めて、西都原地域の古代文化も徐々に解明されてくるものと思います。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、ご協力をいただいた方に心からお礼を申し上げ、さらに本書が、西都原研究資料の一部として広く活用されることを期待いたします。

平成2年3月31日

西都市教育長 平野平

例 言

1. 本書は、県営農村基盤総合整備パイロット事業・尾鈴地区第12・13・14工区の送水管埋設工事に伴い、宮崎県一つ瀬土地改良事業所長の調査委託を受け、西都市教育委員会が実施した。丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成元年10月18日から平成元年12月6日までの間に実施した。
3. 調査関係者は、次のとおりである。

宮崎県一つ瀬土地改良事務所

所 長・中 村 政 義

西都市教育委員会

教 育 長・平 野 平

社会教育課長・清 郁 男

文化財係長・黒 川 忠 男

調 査 員

日 高 正 晴・西都原古墳研究所長

緒 方 吉 信・同上嘱託

義 方 政 無・社会教育課文化財係

調査作業員……篠原時江・緒方タケ子・黒木トシ子・久保田要子・長谷川クミエ

藤原秋子・野田タツ子・野田サエ子・野田良子

4. 本書に使用した図の作成・本文の執筆並びに編集は、緒方吉信が行った。
5. 本書の遺物実測は緒方吉信が行ない、遺物の分類は日高正晴が行った。
6. 本書に使用した遺構の一部に略記号を付した、次のとおりである。
S…方形状土坑、R…円形状土坑、D…溝状遺構、P…柱穴（ピット）
7. 本書に示す方位は磁北である。
8. 本調査によって出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

目 次

I はじめに

1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と歴史的環境	3
3. 発掘調査の概要	10

II 遺 跡 と 遺 物

1. 遺構	19
2. 遺物	29
III まとめ	43

挿 図 目 次

第 1 図 丸山遺跡位置図	
第 2 図 発掘調査地周辺図	2
第 3 図 周辺遺跡分布図	6
第 4 図 土層断面図	12
第 5 図 調査地平面図・遺構位置図（1～6）	13～18
第 6 図 遺構実測図（1～2）	25～26
第 7 図 溝状遺構実測図（1～2）	27～28
第 8 図 柱穴（ピット）実測図	28
第 9 図 出土遺物実測図（縄文土器 1～2）	33～34
第 10 図 同上（土師器・須恵器）	35
第 11 図 同上（陶磁器・古銭）	35
第 12 図 同上（石器 1～2～3）	35～37
表 1 出土遺物一覧表	38
表 2～6 出土遺物計測表	39～42
図 版	45

第1図 丸山遺跡位置図



I. はじめに

1. 調査に至る経過

丸山遺跡は、昭和27年3月27日・特別史跡に指定された西都原古墳群の所在する台地の北辺に在る。

標高凡そ50～80メートルの洪積層台地で、通称西都原と称されるこの地は、300余基の古墳が点在することから、昔時より神聖な場所とされてきた。

この台地上に、西都市を貫流する一つ瀬川の水を送り、農業の近代化を望む声は、昭和40年代前半にすでに起っていた。しかし、歴史的な環境と自然を保護する意味から、この地は一つ瀬川農業水利事業から除外されていた。

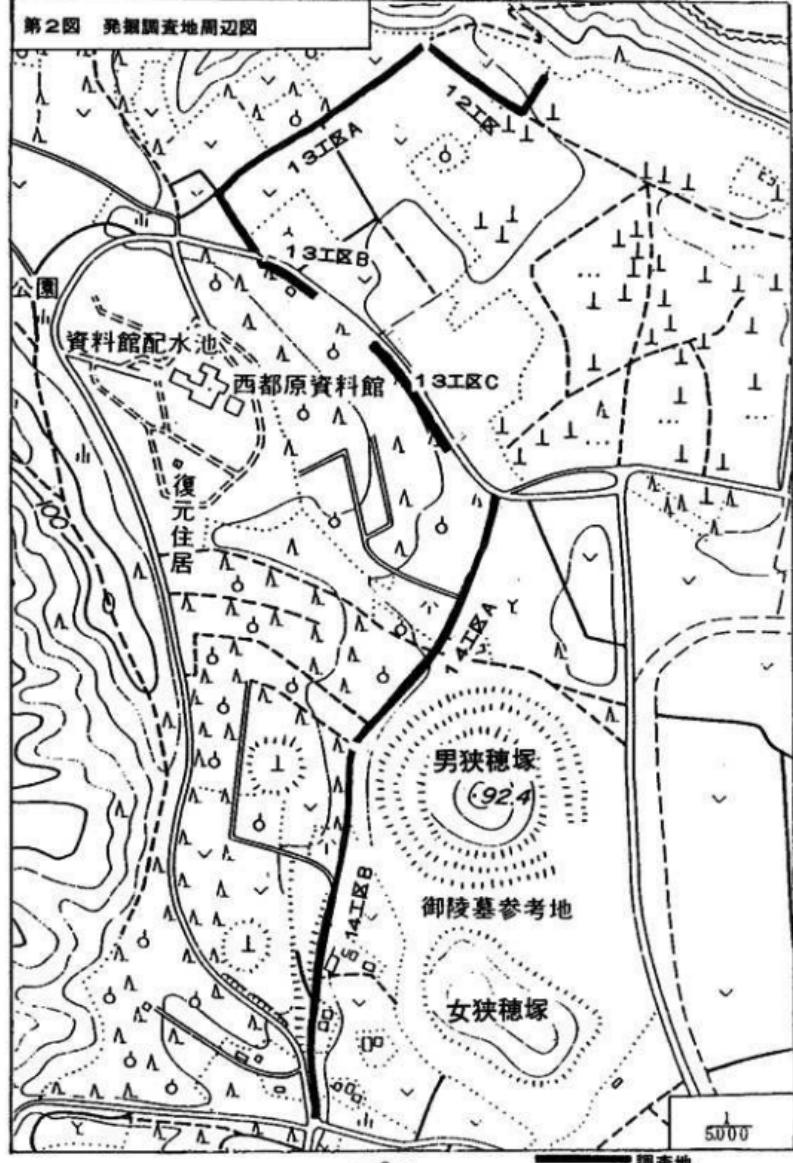
本年度に実施された送水管埋設工事は、昭和62年度に、一つ瀬土地改良事務所、西都市役所（耕地課）、並びに県教育委員会（文化課）、西都市教育委員会（社会教育課）の4者公議によって始まり、数回の協議を重ねて後、平成元年1月24日の西都原協議会でも協議され、総延長1,600メートルのパイプライン埋設工事が着手されることとなった。

この工事着手に先立ち、西都原協議会に於いても協議されているが、このことは、西都原古墳群の密集した地域等、約52万m²が昭和43年度に風土記の丘として開園した後、西都原の風致保存について、官崎県知事・官崎県教育長・西都市長・西都市教育長の4者による確認がなされた。

この確認書の第4項に、「西都原に関して定期的に、又は必要に応じ関係機関の協議会を開き、意見の統一をはかる。」とあり、西都原に関する事例等については、この協議会の意見の統一によって諸事例の進行を見ているからである。

以上の経過を経て、西都原に送水されることが合意に達し、平成元年7月27日付、官崎県一つ瀬土地改良事務所長より、埋蔵文化財発掘通知が提出され、着工前に発掘調査を実施することとなり、記録保存の措置として西都市教育委員会が調査を実施した。調査は、平成元年10月18日に開始し、季節的に天候に恵まれ、縄文時代の遺物等を得て、平成元年12月6日にすべての調査を完了した。

第2図 発掘調査地周辺図



2. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市の中央市街を包含した穂北平野は、西方の背後に九州山地を借景する風光明媚な農耕地帯で、その東端を流れる一つ瀬川は、山地の腐蝕土を常時運び出し、肥沃した耕地を造出する母なる川である。

中央市街の西方に接した台地には、通称西都原と呼ばれる特別史跡西都原古墳群309基が点在し、古代日向国の中心地として華やかな文化の栄えた地域である。

昭和27年3月29日、特別史跡の指定を受けた西都原古墳群は、柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成され、北限説の地下式墳も10数基発見されている。

台地上の古墳群はまた、4グループに分ける事ができるし、東西凡そ1.5キロメートル南北凡そ3キロメートルの地域に散在する。

さらに西都原台地の中央部には、特別史跡309基に含まれない2基の巨大古墳が、明治28年12月4日・宮内庁陵墓参考地として指定を受けている。

指定を受けた、宮内庁所管の男狹穂塚（全長219m・柄鏡式・帆立貝式説あり）と女狹穂塚（全長174m・前方後円墳）は、ともに九州唯一の規模を誇り、照葉樹林の森に囲まれ、静寂な陵墓としての環境を保存し、独特な古代史的景観を見せてくる。

古墳が点在する西都原は、九州山地から穂北平野の南々東に向って突出する岬様台地であるが、南端部の中間台地には奈良時代に建立された一国一寺の日向國分寺跡が保存され、隣接する国府跡の推定地とともに、歴史的な価値の高い地域となっている。

大正元年、宮崎県知事・有吉忠一氏は、同6年まで継続して周知の如く、西都原古墳群中30基の学術的な発掘調査を実施した。このことは、日向国の古代史解明が当時の中心地であった西都市地域、特に西都原古墳の調査にあるとされたことは、このような素地の中に発生したものと思われる。

このときの発掘調査では、重要文化財指定の舟形はにわと家形はにわ（別名子持ち家形はにわ）をはじめとし、学術的にも価値の高いと評される木棺を覆った粘土櫛遺構の発見等があり、国内に於ける古墳研究史上に大きな足跡を残している。

これらの歴史と、西都原古墳群の学術的な価値を永年保存し、顕彰するために行われたのが史跡公園の創出である。

公園事業は、古墳の群集地域東方縁辺部と北辺の環境良好地を合せた525.290m²の地域を風土記の丘として整備し、昭和43年度に開園したものである。

このことによって、古代さながらの西都原の自然環境と古墳群の保護は約束されたが、西都原台地上の風致保存については、昭和45年2月13日付、宮崎県知事・宮崎県教育長・西都市長・西都市教育長の4者によって、保護の確認がなされた。

確認書の内容については省略するが、古墳群とその周辺を含めた西都原の風致を永遠に保存しようとするものであり、原則的に現状保存を特に希望するものである。

台地上全城に古墳が点在する西都原は、古来、地域住民の信仰的な場とされてきた。そのことは文献上にも明らかで、国府時代の総社とも注目される三宅神社を中心に、現代に継承される古墳祭が、応永年間（1394～1428）には「山陵祭」としてすでに執行されている。

蕃制時代もこの「山陵祭」は続けられているが、その祭場は三宅神社ではなく、巨大古墳の男狹穂塚前であった。

この祭事の意味するものに、西都原の呼称が「祭事原」「齊殿原」であったこと、この「さいでんばる」が「さいとのはる」となり、「さいとのはる」が現在の「西都原」と変化してきた。西都原の最も遡る年代資料としては、男狹穂塚の参道に奉納された石灯に、文化14年（1817）の金石文が残される。

2基の石灯に刻まれた文字は、「謹造樹萬基燈」「寺原・西都原若衆中」「文化十四年正月小陽初旬日」と方形竿石の三方に記され、当時にはすでに西都原の文字が使用されていた事を示している。

古墳文化の栄えた西都原は、先史時代の遺跡も、発掘調査や開発もすすんでいない事から特別に取り上げるものもなく、風土記の丘の南端部に於ける前期縄文遺跡の確認や、東方の縄文晚期土器片散布、さらに寺原集落に接して発見された弥生時代住居跡等とわずかな数である。

大正時代、この地で古墳の発掘が実施されたことは画期的な大事業であり、西都原古墳群の学術性がより高く評価された事はいうまでもない。

そして同13年には、史跡名勝天然記念物保存法による仮指定を受け、昭和9年5月に史跡指定を受ける。

時代もすすみ昭和25年になると、それまで分割されていた保存法等が統括され、文化財保護法となった。この新法によって西都原古墳群は、昭和27年3月特別史跡の指定を受けるに至った。

西都原古墳群については、以上の如く国によっての保護策も講じられたが、宮崎県としても昭和33年9月には、県定公園に指定し同36年4月には、県立公園として昇格

指定がなされている。

この公園は、西都原から杉安峠までを包括したものであったが、西都原台地上の風致保存を図るとして、同41年1月には、男狹穂塚と女狹穂塚の陵墓参考地を中心とする地域を県立公園としては初の特別地域に指定された。

以上申し述べた如く、歴史的な経過によって西都原の風致保存方策はすすみ、古墳群の緑地公園構想も起ってくる。

そして昭和43年、史跡公園として全国に先駆けた風土記の丘となり、古墳の群集地域を問わず県公園条例等により、西都原の台地全域が歴史的な環境と古墳群を合せて保護されることとなった。

第3図 周辺遺跡分布図



遺跡分布地名表

妻地区

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 别	時 代	旧番号	文 献	備 考
1001	西部原古墳群	大字三宅・妻・童子丸・右松	古 墓	古 墓	16-13	発掘調査報告書 ほか西都市史等	S.27.3.29. 国特別史跡指定
西部原古墳群明細							
			前方後円墳	円 墳	方 墳		
	大字三宅字原口二		4 基	52基			
	◆ 笹貫畠			4 基			
	◆ 酒元ノ上		4 基	37基			
	◆ 東立野		7 基	40基			
	◆ 西都原東			53基		1基滅失	
	◆ 丸山			3 基	1 基		
	◆ 寺原		3 基	22基	1 基	3基滅失	
	◆ 原口		1 基	7 基			
	◆ 須先			1 基			
	◆ 国分		1 基	2 基			
	◆ 尾筋東上		3 基	2 基			
	◆ 尾筋西上		1 基	6 基			
	◆ 尾筋東下		1	2 基			
	◆ 尾筋西下			3 基			
	◆ 竹之脇		1 基				
	◆ 鳥子長田			3 基			
	◆ 堂ヶ島			11基			
	◆ 夢崎			2 基			
	◆ 馬場崎			1 基			
	◆ 上ノ宮西			1 基			
	◆ 寺原脇			1 基			
	大字妻字妻園			1 基			
	大字童子丸新立		1 基	10基			
	◆ 椿原原			2 基			
	大字右松字剣田			1 基			
	◆ 寺馬場			1 基			
	◆ 鷺田		1 基	11基			

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号	文 約	備 考
1002	清水西原古墳群	大字清水・三宅	古 墓	古 墓	16-30 16-31 16-32	日向地誌	S.9.417. 県指定史跡

清水西原古墳群所在地明細

大字清水字松崎 前方後円墳 2基

寺山 円 墓 4基 1基滅失

大字三宅字西原 円 墓 19基 1基滅失

1003	上ノ原遺跡	大字清水字上ノ原 寺山	散布地	古墳～平安			
1004	寺山遺跡	大字清水字寺山	散布地	古 墓			
1005	清水遺跡	大字清水字大瀬・松崎 鹿久原	散布地	弥生～古墳			
1006	下尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東下 尾筋西下	散布地	弥生～平安	16-28	日向国史	
1007	上尾筋遺跡	大字三宅字尾筋西上 尾筋西上	散布地	弥生～平安	16-28	日向国史	
1008	日向國分寺跡	大字三宅字國分	寺 跡	奈良～江戸	16-33	日向地誌・舊屬 真古報告書ほか	
1009	國分遺跡	大字三宅字國分 大字石松字鷲田	散布地	繩文～江戸			
1010	上宮遺跡	大字三宅字上ノ宮東 上ノ宮西	散布地	弥生～平安			丹波小野伝承地を含む遺跡
1011	上宮古墳	大字三宅字上ノ宮西	円 墓	古 墓			2基(1基はも滅失)
1012	上宮城跡	大字三宅字上ノ宮西	城 跡	中 世			
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	城 跡	奈町～安土桃山		日向記・ 日向地誌	
1014	諏訪遺跡	大字三宅字毘沙門 大字右松字鷲田	散布地	繩文～古墳			
1015	酒元遺跡	大字三宅字酒元 山王前原	散布地	弥生～江戸	16-29		
1016	堂ヶ島遺跡	大字三宅字葛穂・石質雄 大字南字御園	散布地	弥生～平安			
1017	寺崎遺跡	大字三宅字寺崎 大字右松字御園 大字南字御園	集落跡	弥生～江戸	16-26		旧番号は坂元遺跡
1018	上妻遺跡	大字右松字御園 大字妻字上妻	散布地	繩文～江戸			
1019	経塚	大字妻字上妻	経 塚	平 安	16-27		都万神社境内
1020	法元遺跡	大字三宅字法元 大字右松字御園 大字南字御園	散布地	弥生～江戸			
1021	童子丸遺跡	大字童子丸字内・上園 寺・馬場	散布地	繩文～江戸		日向国史	
1022	上園古墳1号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1023	上園古墳2号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1024	上園古墳3号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1025	石貫遺跡	大字三宅字石貫平ノ下	散布地	繩文～江戸	16-25	佐土原郷史稿	伝承遺跡の保存地域
1026	原口遺跡	大字三宅字原口二ノ西 原口・原口二	散布地	弥生～平安		日向国史	
1027	寺原遺跡	大字三宅寺原・寺原駅	集落跡	弥生～平安	16-24	日向国史	

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号	文 献	備 考
1028	丸 山 遺 跡	大字三宅字九山・西都原東 西都原西	散 布 地	弥生～ 平 安		日向国史	
1029	西 都 原 遺 跡	大字三宅字真金野・酒泥ノ上 原口二	散 布 地	縄 文～ 古 墓		西都市史	
1030	伝・山路城跡	大字三宅字上田津・九	城 跡	中 世		日向地史	
1031	四 日 市 遺 跡	大字岡富字四日市	散 布 地	奈 良～ 平 安			
1032	有 峯 城 跡	大字岡富字有峯	城 跡	室町～		日向地史	
1033	祇園 原 遺 跡	大字右松字祇園ノ上	散 布 地	縄 文～ 古 墓	16-34	西都原史・日向歴史 佐土原藩史稿	旧番号は大口川遺跡
1034	新田原古墳群	大字右松字祇園ノ上	古 墓	古 墓	16-31	県史跡調査 報告(4)	

3. 発掘調査の概要

本調査の対象となった土木工事は、農業の近代化施設を導入し農家所得の向上を図るために、一つ瀬川の水を西都原に送る送水管路工事であり、台地上の幹線総延長 1,600 メートル、支線に 1 号、2 号、3 号の 3 支線がある。

調査地の設定は、支線の 3 線とも傾斜地であること、掘削面が狭小ということから工事中の立合いとし、幹線は幅 1 メートル、深さ約 1.5 メートルの掘削であり、全地の調査を必要とした。

しかし幹線内に、目通り径 30 cm 前後の杉が間隔も置かず防風林として植樹された箇所があり、この地は調査も不可能な樹根による攪乱も受けているとして除外し、調査地の総延長を約 1,236 メートルと設定した。

調査は、西都原台地の北東端に位置する古墳群中第 3 古墳群の北辺に接した工事工区の 1・2 工区から着手し、順次 1・3 工区・1・4 工区と工事の進行に連続して行ったが、地形等の都合上、1・3 工区の調査を A・B・C、1・4 工区の調査地を A・B に区分した。

また送水管の埋設工事は、主として道路敷地に施行される事から、調査作業の困難を予想し、最初に砂利層の道路面及び舗装面を重機によって掘削し、その後に第Ⅲ層（赤ホヤ）まで掘り下げて遺構等の検出を行った。

第Ⅲ層での調査が終了した後、5~6 メートル間隔に長さ 2 メートルのトレンチを入れて、第Ⅵ層まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認し、埋蔵が確認された地域は全面を掘り下げて調査をすすめた。

1・2 工区調査地は、穂北平野から西都原に上る旧道で、台地に達した地点から調査地とし、中央部に向って約 43 m 進み、曲折して北上する総延長 125 m の平坦地である。

出土した遺構は、方形状土坑 2 基、円形状土坑 2 基、溝状遺構 1 基、柱穴 1 個であり、遺物は、第Ⅵ層上の全面に径 5~20 cm 程の焼石が散乱し、この焼石に混じって多くの縄文土器片等が出土した。

1・3 工区 A 調査地は、1・2 工区が北辺で西に向って曲折した地点に始まり、延長 310 m の農道で、西辺を市道西都原線までとした。

出土遺構は、方形状土坑 1 基、円形状土坑 1 基、溝状遺構 1 基、柱穴 28 個が検出され、遺物については、1・2 工区につづき 120 m の位置まで第Ⅵ層上に焼石が散布し、前項同様縄文土器片が混じって出土した。

焼石が消滅した地点以西では、36 m 離れた位置に約 2 m 程の区域で焼石が検出した

だけ、以後は全調査地から焼石は検出されていない。

13工区B調査地は、同一工区であるが市道西都原線によってA区と区分し、市道に沿って南下する43mの調査地であり、以南は、前述の如く杉が植樹され調査は不可能であった。

この場所は、栗が植栽され過去に於ける整地も実施済地であって、第II層は流失し第VI層まで人力で掘り下げ遺構等の検出作業を行った。

出土遺構は、溝状遺構2基であり、遺物は遺構に伴った遺物と想定しがたい縄文土器片がわずかに出土しているだけである。

13工区C調査地は、B調査地と同様市道に沿って西側を南下し、約100mの間を置いた延長119mの調査地である。

現状は畑作地であるが、過去にゆるやかな東向きの傾斜地を削平し、略平坦の畑地に改良、さらに調査対象個所は、防風林の杉が植樹された時期もある等、かなりの擾乱を受けていた。

調査は、人力によって第II層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行ったが、横断する溝状遺構1基を検出しただけ、遺物は出土していない。

土層も、第II層の流失個所が多く擾乱層も多かった。以下トレンチを入れて第VI層まで掘り下げ、遺構等の所在確認を行ったが、検出するには至らず調査を終わる。

14工区A調査地は、西都原台地の中央に位置する宮内庁所管の陵墓参考地北辺を東西に横断する市道上であって、総延長639mの内東方275mをA調査地として、西方364mと区分し調査を実施した。

調査地は、さらに東部・中部・西部とに区分すると、東部は13工区C調査地につづく地形で西端は下り坂、中部は、北方が一段と高くなった地域から南方に下る谷間状の地形であり、西部は上り坂となった変化する地形である。

東部の北辺は、近世に寺院が建ち集落の2~3戸が存在したとする地域であって、これらと関係する遺構の出土も考慮していたが、遺物の出土もなく、わずか柱穴3個が検出されただけである。

中部は前述の如く谷間状の地形で、溝状遺構3基が検出されたが、遺物は出土していない。西部も地形上からか、遺構の検出ではなく土器片3点が出土しただけである。

総合的に本調査地は、舗装道路であることから重機によって表土を削除する。東部は表土の直下に第II層が所在し、中部は盛土された地形が多く、西部も第II層は浅く、地形的に流失した個所が多かった。

調査は、第III層によって遺跡の所在を確認し、第VI層迄はトレンチを入れたが、第III層破失部が多く、大半を第VI層まで掘り下げる調査をすすめた。

14工区B調査地は、調査地の最終区で前項A調査地につづく市道上の調査地である。この調査地の地形は、北辺が高く南辺の低い急傾斜地で、西辺最終地約60m程がゆるやかな傾斜地となっている。

この地形上に、市道が横断し送水管埋設工事が施行されるが、大半地に遺構・遺物の検出はなく、西辺附近に方形状土坑1基・溝状遺構1基の所在が確認された。

出土遺物は、溝状遺構上に寛永通宝の古銭が1個、少し間隔を置いた地点に土器片2点が出土しているだけであった。

以上が発掘調査の概要であるが、検出した遺構は、横幅約1mの帯状調査地であった事から、古墳の周溝・住居跡の一隅等と想定される遺構も検出されたが、遺構名を詳らかとするに難が多く、方形状・円形状・溝状等とした。

出土した遺構は、方形状土坑4基、円形状土坑3基、溝状遺構9基・柱穴32個である。

出土遺物は、繩文土器・土師器・須恵器・石鏃・石斧・石錘・敲石・剥片・フレイク・陶磁器・古銭と総計169点が出土している。

これらの遺物は、主流となるのが第1表のとおり繩文土器126点であり、主に東辺調査地から出土しているが、石器と古銭を除き完形もしくは完形に近い遺物ではなく、すべてが小片の遺物として出土している。

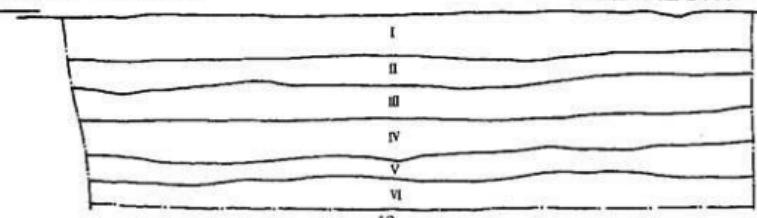
土層については、層位の基本を包含層の確認できる位置とし、全調査地の平均的な13工区A調査地の中央部に置き、第VI層まで掘り下げる確認した。層位は次のとおりである。

第I層	表 土	第IV層	黒褐色土
第II層	黒色土（第I層と同）	第V層	暗褐色土
第III層	明黄褐色土（赤ホヤ層）	第VI層	褐色土

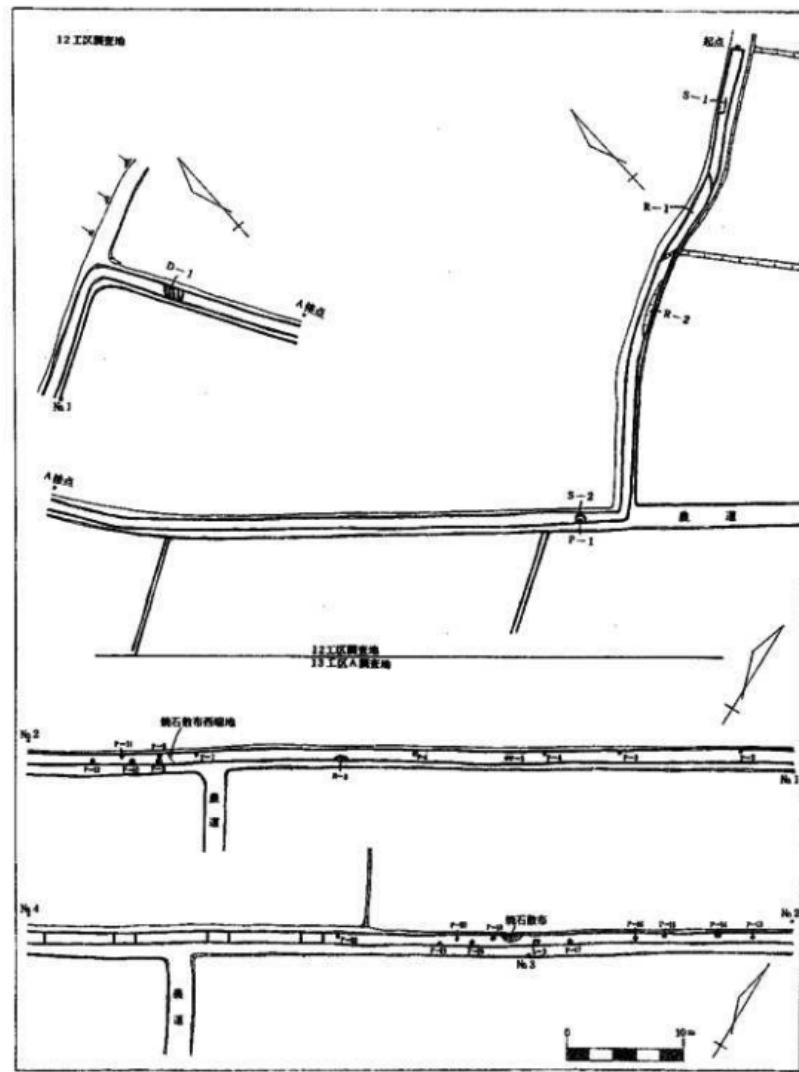
遺物は、第VI層の上部より出土しているが、それ以下の層位からは検出されていない。

第4図 土層断面図

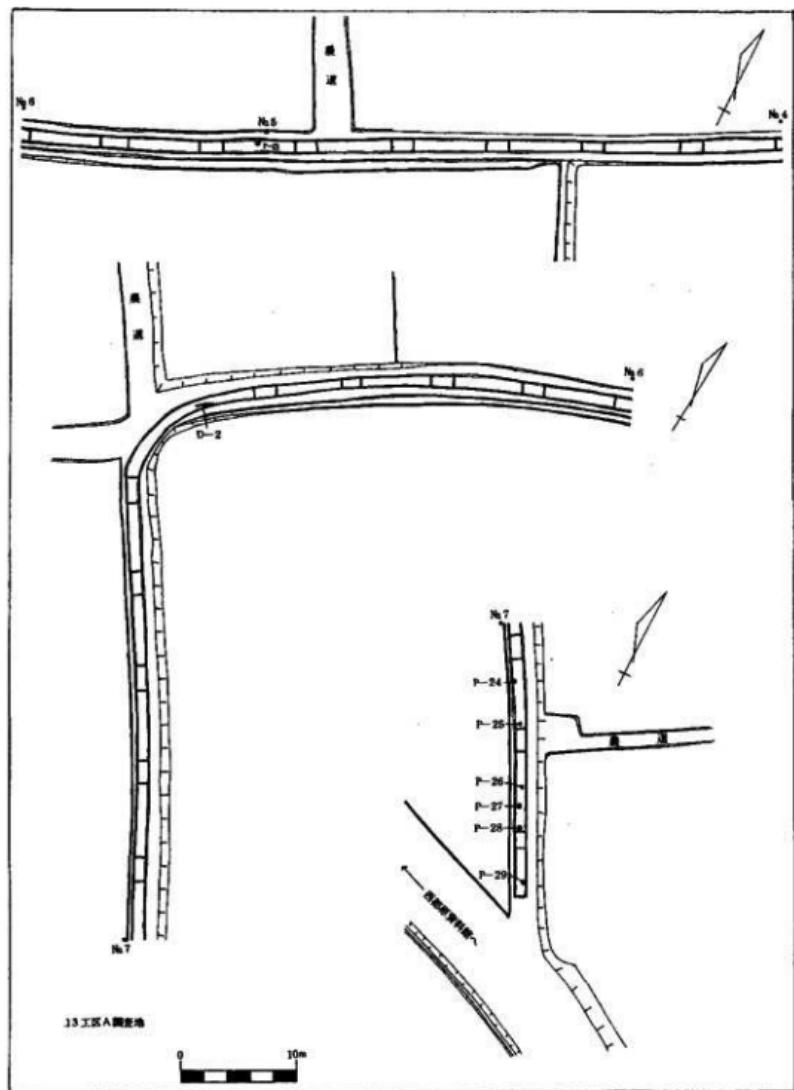
13工区A調査地中央部



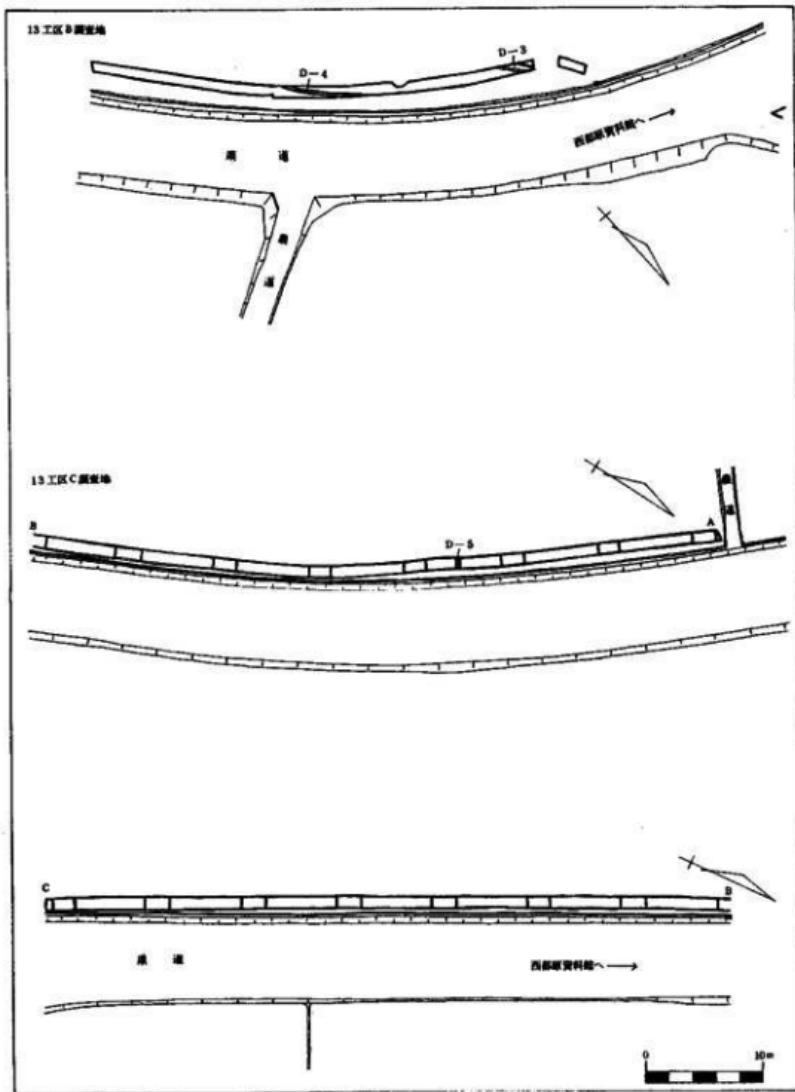
第5図 調査地平面図・遭難位置図(1)



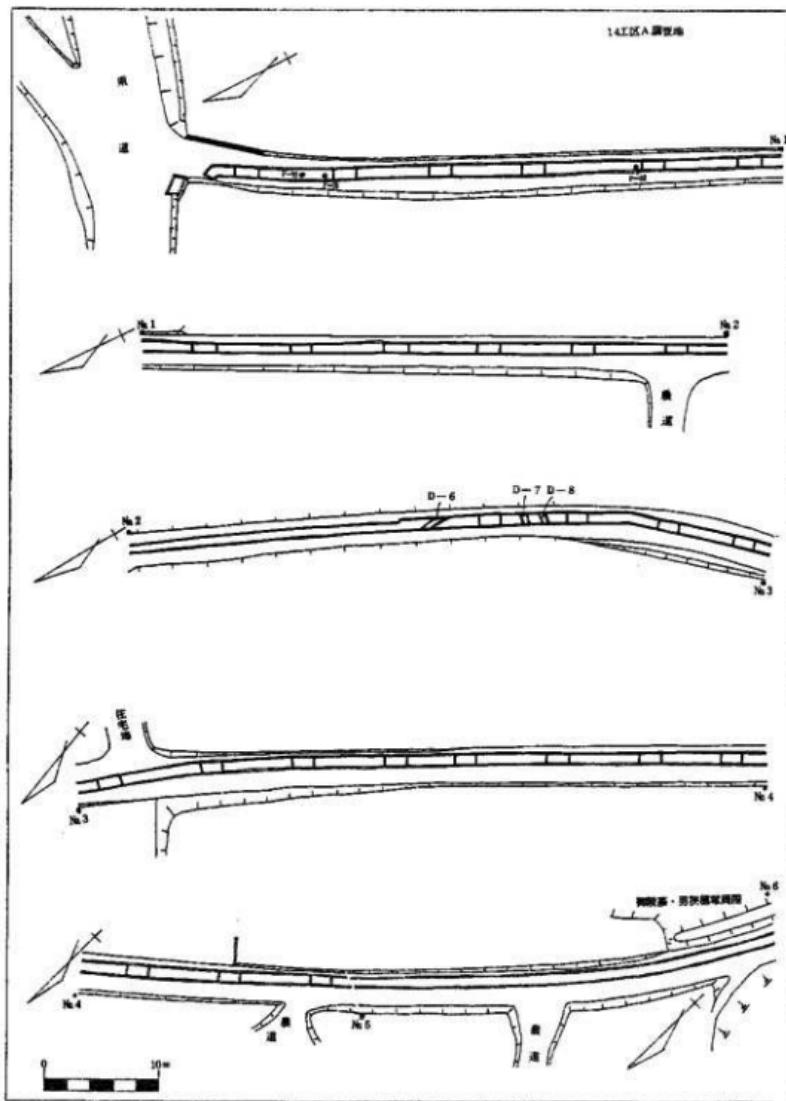
第5図(2)



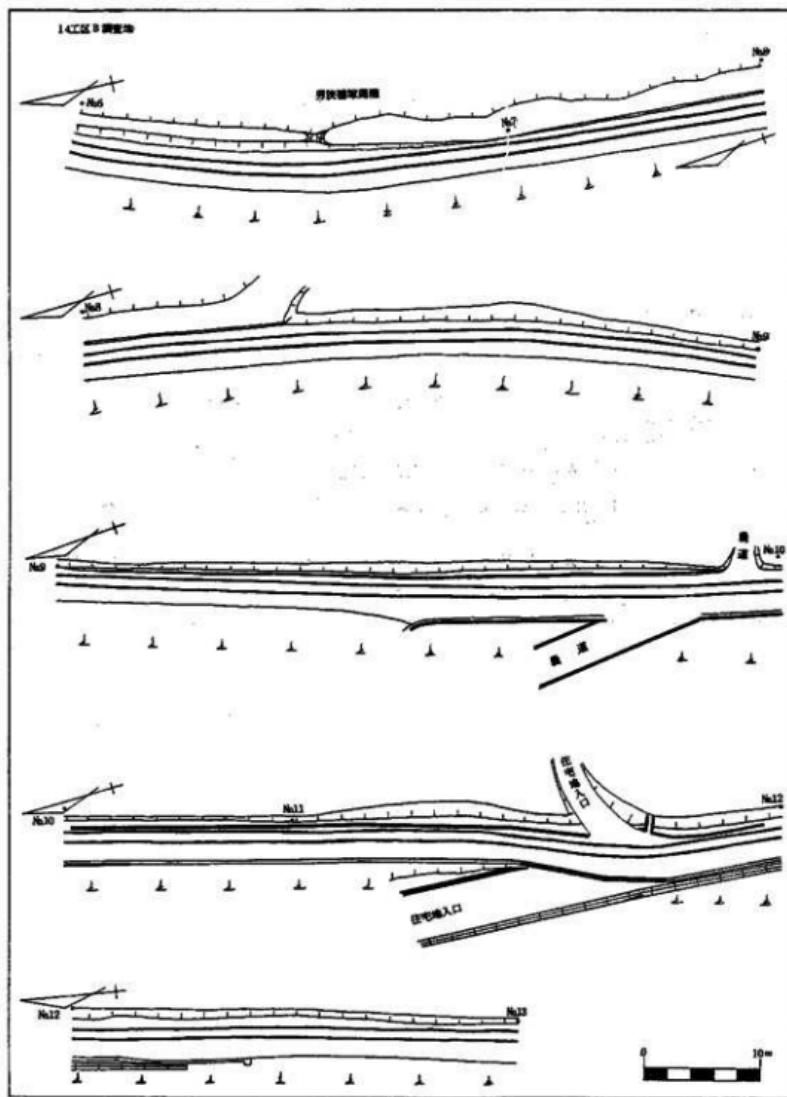
第5図(3)



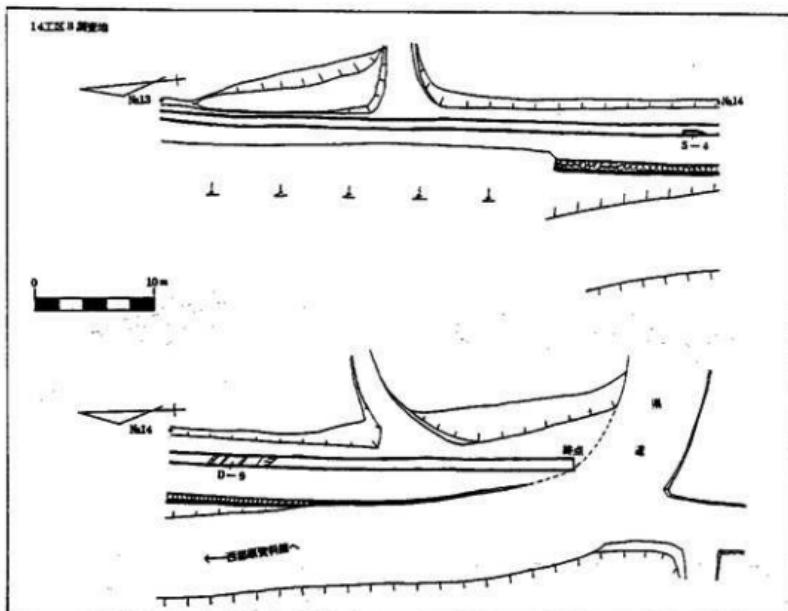
第5図(4)



第5図(5)



第5図(6)



II. 遺構と遺物

1. 遺構

方形状土坑1号(第6図)

この遺構は、12工区調査地の東端起点から、約5mの位置に検出された。地形は、西方が高いゆるやかな傾斜地で、調査地に平行し方形状土坑の一角が出土、東辺は傾斜地のため消失している。

地層第Ⅲ層に確認された遺構は、南西隅だけが遺存し、南東隅は消滅他隅は調査地外のため確認されていない。

検出遺構の壁長は、南壁が略東西に1.95m、西壁長4.5cm迄で終り、検出床からの遺存壁高は1.9cmである。

遺構の南西隅は方角隅で、壁面の立上り等から古代住居跡とも想定されるが、一部の検出であり、北辺が調査地外のため遺構の全容を確認するには至らなかった。なお埋土は黒色土であり、遺物は伴っていないかった。

方形状土坑2号(第6図)

この遺構は、調査地起点から西に4.2m進み、さらに曲折して北方へ約3mの地点に、柱穴1号を伴って検出された。地形は平坦地。

遺構は長方形の規模を有し、中心長軸は8.3cm、横幅7.0cmの小土坑で、南および北隅は方角隅、東および西隅は円曲線を描く変形プランを呈する。

第Ⅲ層による遺存壁高は約1.0cm、遺構の種別は詳らかでなく、遺物も伴っていない。

なお、同遺構の西隅に径3.8cm、深さ4.3cmの柱穴(1号)が掘り込まれているが、遺構に関係するかは断定できない。柱穴内からも遺物は出土していない。

方形状土坑3号(第6図)

この土坑は、13工区A調査地の中央附近に検出した遺構で、調査地の南側壁下から突出し、その部分が方形であることから方形状土坑とした。

検出部の規模は、横幅5.3cm、長軸は約6.0cm、延長は調査地外のため計測不可能で、遺構の全容を確認するに至らなかった。

第Ⅲ層による遺存壁高は3.5cmを計測し、検出した2隅は方角隅である。床は平面で

隅は角張って立上る壁面であった。

方形状土坑4号(第6図2)

この遺構は、14工区B調査地の調査終点から、東へ約37m進んだ位置に、西側壁と平行して検出された方形状の一辺のみの遺構である。

地形は、ゆるやかな傾斜地であって、第III層による規模は、長軸約2m、他方は調査地外のため不明確である。北壁の検出長は約40cm、南壁は方形状の隅位置で検出されず、遺存壁高は約22cmである。

長方形か方形プランかも詳らかでなく、小規模の住居跡とも想定されるが、全容も確認するに至らなかったことから、遺構を方形状としたものであり、遺物は伴っていなかった。

円形状土坑1号(第6図2)

この遺構は、12工区調査地起点から西に約11m進んだ位置に、主体部を北辺調査地外に置き、円形状の南端部が検出されたものである。

検出部の略東西長は約8.6m、南北中心部の南端はわずかしか検出されていない。第III層による遺存壁高は、東端で約15cm、西端で26cm、検出床面の東西高低差は東方が低く約4cmである。

この遺構の南約20mには、西都原古墳が点在し、地形的に古墳の周溝とも想定されるが、遺物は伴わず一部遺構の検出であって、遺構名を確定するに至らなかった。

円形状土坑2号(第6図2)

この遺構は、円形状土坑1号の西に約1mの間を置いて検出された。前項遺構同様古墳周溝とも想定されるが、円形状の北端部が検出しただけで、遺構名を決するには至らなかった。

第III層に掘り込まれた遺構は、ゆるやかな円曲線を描き、東西に5.7m延びている。南北の検出は40cm、深さは26cmで床面に達している。遺物は伴っていなかった。

円形状土坑3号(第6図2)

この遺構は、13工区A調査地の起点・東端から西に約39m進んだ南壁面寄りの小規模遺構として検出された。

第III層による検出規模は、東西1.08m、南北27cmの検出で、半月状を呈し遺物は伴っていなかった。

南面が調査地外のため、円形か椭円形か等も不明確であり、遺構名を決するには至らなかった。検出遺構の深さは約10cmである。

溝状遺構1号(第7図)

溝状遺構1号は、12工区調査地の北辺部に検出された遺構である。南北に延びた調査溝を東西に横断し、北端に1条が独立溝として第III層に掘り込まれ、さらに南へ約40cm隔れ2条の溝が切合して検出された。

北辺の独立溝は、中心幅8.2cm、深さ3.5cmである。他2条溝の内北溝は、横幅の計測ができないが、深さは3.5cm、床面は南に2.6cm延びて南辺溝と切合する。

南辺溝は、中央溝との切合部から、横幅は約1m、深さは切合部から約12cm下って第V層に達し、南壁も中央溝との切合部と同高位で、その上層位は搅乱を受けている。遺物は伴っていない。

溝状遺構2号(第7図)

溝状遺構2号は、13工区A調査地が東から西に延び、西辺で急曲して南に向う地域に検出された。

調査溝に略並行し、第III層に掘り込まれた検出長径は約2.5m、遺存壁高約20cm、東端は調査地外へ入り込み、西端は搅乱層となって破失する。

円形状に延びる遺構は、円墳周溝等とも想定されるが、附近に古墳も所在しないし、一部検出という事から遺構名を決するに至らなかった。遺物も伴っていない。

溝状遺構3号(第7図)

溝状遺構3号は、13工区B調査地の北辺に検出された遺構である。本調査地は13工区の西端が市道西都原線によって分断され、ここより市道に沿って南下する調査地である。

遺構は調査溝を横断して検出され、やゝ半月状の床面となった溝である。第III層に掘り込まれ、遺存溝の横幅は8.4cm、深さは2.3cmを計測する。遺物は伴っていない。

溝状遺構 4号(第7図)

溝状遺構 4号は、前項遺構の南約12mの位置に、細長い溝状で検出された遺構である。

周辺には、縄文土器片数点が散布しているが、遺構に伴った遺物かは詳らかでない。

検出遺構の規模は、長さ約7.0m、中心横幅31cm、深さ7cm、床の形状は略平面で西端は角度を有して壁面が斜上する。

調査溝の東壁内から、西壁内へ斜に延びる帯状の小溝である。

溝状遺構 5号(第7図)

溝状遺構 5号は、13工区の最終地近く・同C調査地の北辺に、調査溝を東西に横断して検出された。

第III層に検出された遺構の規模は、横幅47cm、深さ9cm、床は平面で両端は角度を有して斜上する。遺物は伴っていない。

溝状遺構 6号(第7図)

溝状遺構 6号は、14工区A調査地の中央部谷間状地形地に検出された。

第III層に掘り込まれておらず、形状は調査溝を斜線に横断し、床の南端は東辺が中央に少し寄って略円形状となっている。

規模は、中心横幅64cm、深さ31cm、延長は、両端が壁面下に延びて確認されない。遺物は伴っていないかった。

溝状遺構 7号・8号(第7図)

この2条の遺構は、前項6号の西方約6mと近接して検出された。共に第III層に掘り込まれ、調査溝を直に横断する。

7号と8号の間は85cm、規模は、7号が中心幅60cm、深さ7cm、8号は幅56cm、深さ10cmが遺存する。

床の形状は、7号が略平面状の床で、両端はやゝ丸味をおびて斜に立ち上る。8号は、半月状の床面を呈するも、北辺はやゝひずみがあり、床面と壁面は区分されない。7号・8号とも遺物は伴っていない。

溝状遺構9号(第7図②)

溝状遺構9号は、14工区B調査地・本調査対象地の最終点から、略東方へ約2.6m進んだ位置に3条の横断する溝として検出された。

調査地内約3mに亘って横断する本遺構は、中央部分が相当の擾乱を受け、第III層は西端部を残し消失している。

この3条の遺構を、略西方からA・B・Cと略号を付し、A遺構は独立して第III層に検出された。横幅は約7.5cm、深さ3.5cmである。

床面の検出部は、北端が幅4.5cm、南端は約2.0cmと湾曲して狭くなっている。

B遺構は、A遺構の東へ約4.0cm離れて検出された。西壁は第III層から掘り込まれているが、東壁はC遺構の構築によって削平されたと想定され、北辺にわずかな痕跡を残すのみである。

規模は、横幅の計測はできないが、床面の幅は約3.0cm、西壁の遺存高は3.5cm、直の横断ではなく、ゆるやかな円曲線を描いている。

C遺構は、第IV層V層に検出され、調査溝を少し斜に横断する。遺構の西辺はB遺構の休と切合し、床は丸味をおびた溝状である。

遺存層による検出規模は、幅3.4cm、深さは1.2cmと浅いが、A・B遺構の検出第III層から想定すると4.7cm程となる。

3条の本遺構は、ともに土器類等の遺物は伴っていないが、A遺構の西端上に流入遺物と思われる古銭(寛永通宝)1個が出土している。

柱穴1号～32号(第8図)

柱穴(ピット)は、12工区調査地に1個、13工区A調査地に28個、14工区A調査地に3個、計32個が検出された。埋土はすべて黒色土であった。建物跡としての確認はできなかった。

柱穴1号は、方形状土坑2号の項で記録したとおり、同遺構内に検出された柱穴(ピット)である。

2号～22号の21個は、13工区の起点から西へ約100mの間の調査地から、間隔も不均等に検出された。

第III層に確認された同柱穴は、大半が径3.0～4.0cm、深さ1.5～4.5cmであり、19号の方形を除き円形もしくは橢円形である。

23号は、22号の西方約7.3mの位置に1個だけ検出し、円形幅(径)は3.0cm、

深さ22cm、底部はやゝ乱れが感じられる。

24号～29号は、13工区A調査地の西端から、約20mの間に不均等に検出された。この6個の内26号・27号・28号は、間隔も2m前後と列をなしているが、住居跡等と関連するかは確認されていない。

規模及び形状については、26号と29号が橢円形、他は円形状で径は22～23cm深さは24号が18cm、他は35cm前後であった。24号を除く他はしっかりした遺構である。

30号・31号・32号は、14工区の起点近くに検出しているが、30号・31号間は約2m、32号は31号の西約27mと少し離れた位置にある。

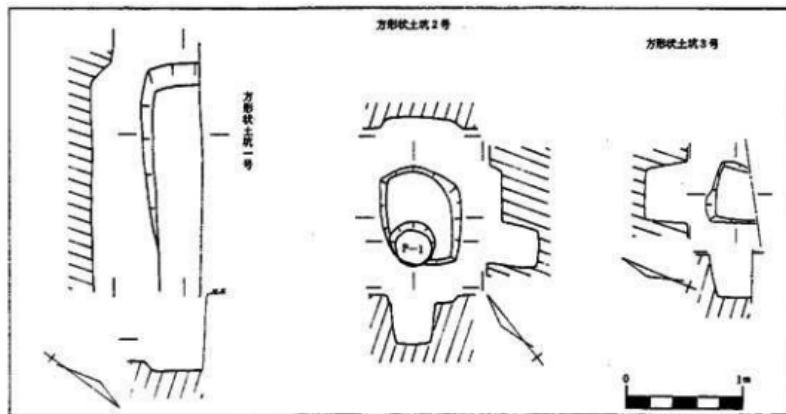
規模は、30号の径35cm、深さ34cm、31号は径33cm、深さ32cm、32号は径29cm、深さ32cm、3個ともしっかりした円形の柱穴である。

検出した32個の柱穴は、すべての埋土が黒色土であり、遺物は伴っていなかった。また柱穴間の間隔も不均等であり、古代住居跡・中近世建物の柱穴と断定することはできなかつた。

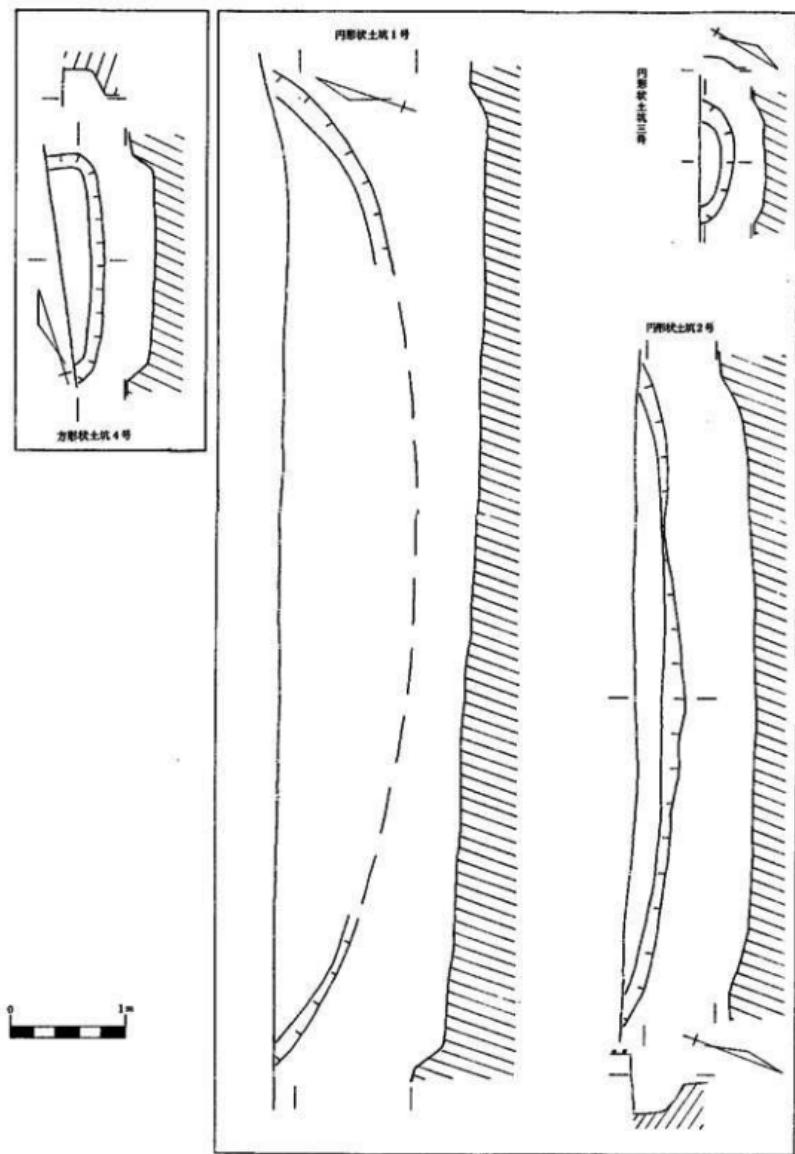
以上のとおり、検出された遺構について述べたが、調査地が横幅約1mと狭いこともあり、さらに遺構の大半が調査地外のため、全容を知る事も不可能であった。

これらの全遺構はまた、第Ⅲ層に検出された遺構で、埋土はすべて黒色土であったが、遺物が伴わず、諸事条件により遺構名の断定、時代判断も詳らかとするには至らなかつた。

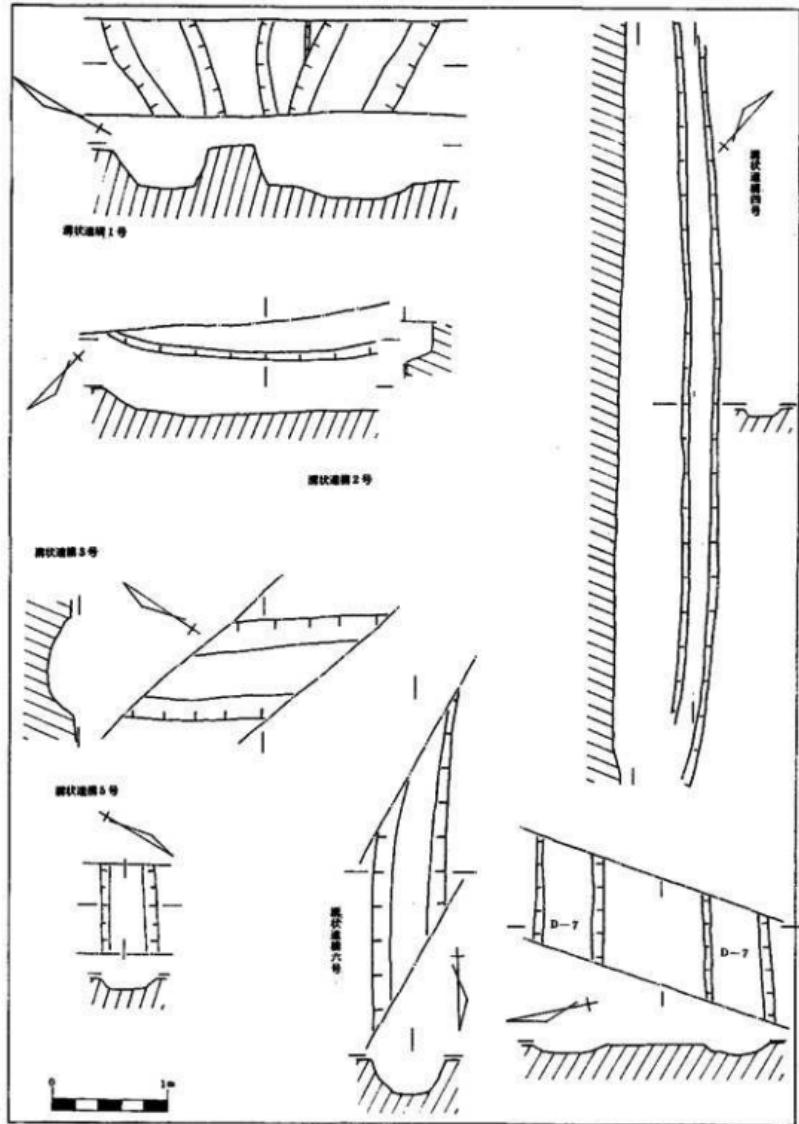
第6図 遺構実測図(1)



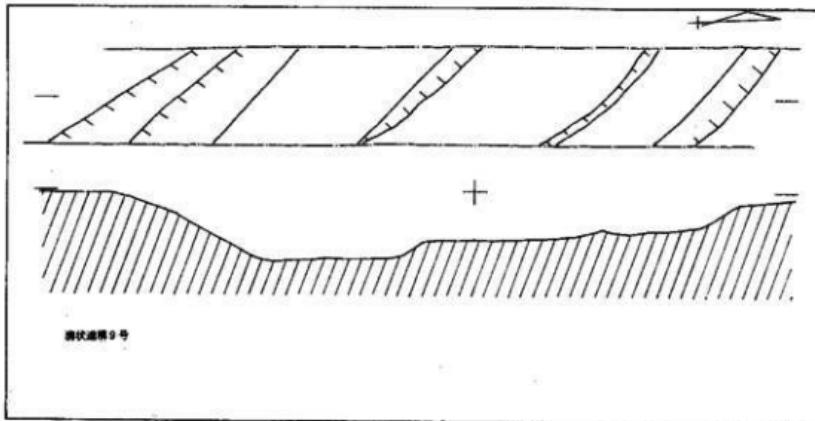
第6図 遺構実測図(2)



第7図 溝状遺構実測図(1)

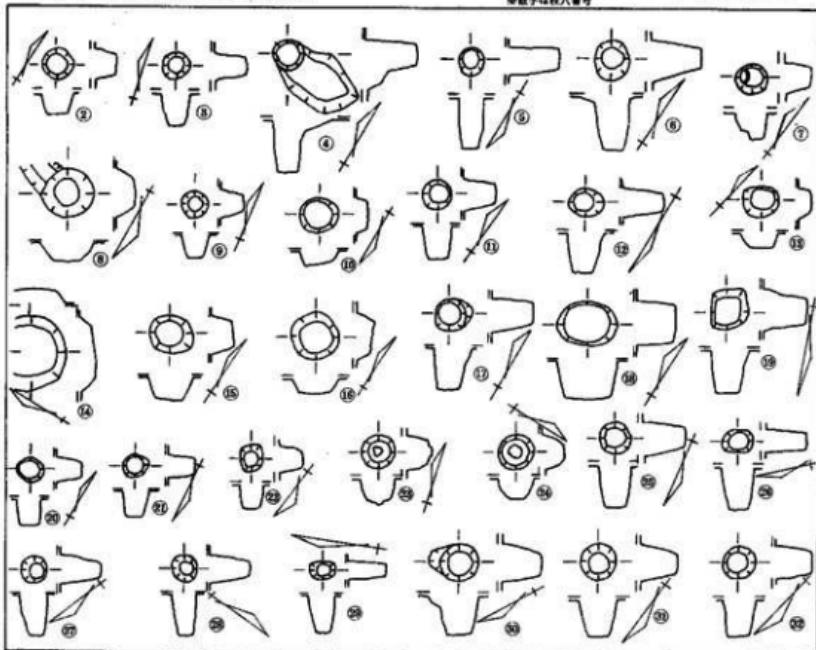


第7図(2)



第8図 柱穴(ピット)実測図

*数字は柱穴番号



2. 遺物

出土遺物は、表1に示すとおり12工区及び13工区Aに集中して出土し、総数は169点と調査地に比して少量であるが、縄文土器主体であって、器種は深鉢の占める比率が大である。

これらはまた、すべて完形もしくは完形に近い遺物は石器を除いて皆無であり、極めて小片が多く、さらに遺構内出土遺物も少量は存在したものの、伴出遺物とするにはいたらなかった。

石器についても、12工区及び13工区Aに集中し、他は13工区Bに石錐3点が出土しているだけである。

出土遺物の内訳は、縄文土器126点、土師器3点、須恵器2点、陶磁器4点、古錢1点、石器33点となっている。

(1) 縄文土器(第9図1~2)

縄文土器は、12工区及び13工区Aに集中して出土し、他は14工区Bの最終調査地からわずか2点が出土したのみである。

図番号①~⑩は、大半が早期の貝殻条痕文土器系前平式土器であり、他は条痕文を施してはいるが、風化の為確認するに至らず、無文の土器も縄文早期の遺物である。

①は、深鉢の口縁部残片で、胸部はゆるく内湾し口縁近くで外反する。口縁部に径0.6cmの穿孔1つが確認される。

②は、①と同様の口縁部残片で、胸部がわずかに内湾して立ち上がる、やゝ角張った口縁を有する。口縁部に径0.5cmの穿孔が確認される。

③は、深鉢と推定される口縁部の残片で、外反する立ち上がりを見せ、丸味を帯びた円頭口縁である。

④は、深鉢上部のクビレ部と推定され、内面に棱が認められ外反して立ち上がっている。

⑤・⑥は、深鉢の胸部残片で、ともにゆるく内湾して立ち上がる。⑦は深鉢の胸部残片であるが、上端はクビレ部と推察され、内湾気味に立ち上がり上部でわずかに外反する。

⑧は、深鉢胸部の下方残片で、大きく内湾した立ち上がりである。

⑨~⑩は、深鉢と推察される胸部残片であり、文様は以上①から⑩までのすべてが具

般条痕文の土器である。

⑩は、深鉢口縁部の残片で、数条の条痕文が施文され、外反した立ち上がりを見せる円頭口縁のものである。

⑪は、⑩と同様角張った口縁を有し胸部はわずかに内湾している。施文は条痕文がわずかに認められるも、風化の為確認するには至らない。

⑫～⑯は、深鉢胸部の残片と推察される。⑬・⑭は無文土器であり、⑮・⑯・⑰・⑱は、わずかな条痕文が認められるが風化し確認できない。

⑲は、深鉢底部から立ち上がった胸部残片で、内面は大きく凹んで内湾し、外面は風化がひどく、表面も欠けて施文・無文も確認できない。

⑳は、深鉢底部の残片で、平底の一部を残して立ち上がる。外面は⑲と同様風化し、表面が欠け施文等は確認できないが、内面は大きく内湾して立ち上がる。

図番号⑭～⑯及び⑰～⑲は、①～⑩と分数された格好となったが、同一の縄文土器であり、内⑭～⑯は表2 縄文土器計測表に示すとおりである。

器種も同様深鉢と推察され、大半が条痕文の施文が残されるが、外面が風化し鮮明でないものが多い。よって本項では割愛する。

以上35点を登載したが、他の91点は類似し小片でもあって省略した。器種については、一応深鉢と記したが、小片という事で決しがたく、深鉢としたものが含まれる。

さらにこれらの土器は、すべての内面がナデ調整で胎土は良好、1～3ミリ程度の粒子と雲母を含んだ遺物である。

(2) 土師器・須恵器(第10図)

土師器は、男狭穂塚後方の周庭帯附近・14工区Aから3点出土(接合して2点)だけである。

①は、甕の脇部片で、わずかに内湾して立ち上がり、肉薄に仕上げられた口縁近くの遺物と考察され、外面に2条の突帯がめぐらされる。

器面調整は、粒子が浮き出る程風化している為鮮明ではない。胎土は荒く長砂粒を含む1～3ミリの粒子を多く含んでいる。

②は、①と同様甕の脇部片で、下方が大きく上半がゆるく内湾して立ち上がり、底部近くの遺物と考察される。

器形は肉薄に仕上げられているが、器面調整は粒子が浮き出る程風化しているため鮮明ではない。

須恵器は、表1に示すとおり13工区Aに2点（接合）出土しているだけである。

器種は、肉薄の甕の片で法量計測はできない。器面調整は、ヘラ調整後に外面がヨコメ・タテメのハケメ調整痕が残される。内面はヨコメのハケメ調整、内外面とも釉が施されている。

(3) 石 器(第12図1~3)

石器は、表1に示すとおり12工区及び13工区Aに集中し、他は13工区Bに石錐3点が出土しただけで、総数は33点である。

図番号④は、13工区Aの散乱する焼石に混じて出土した剥片石器である。石材は頁岩である。

⑤は、12工区の焼石に混じて出土した敲石である。法量は、長軸13.0cm、短軸11.9cm、厚さ6.1cmのもので、略円形を呈した砂岩製のものである。

⑥は、打製石斧で13工区Aから出土している。石材は頁岩製でクビレ部近くで折損した頭部の残片である。

石錐は、⑦が12工区、⑧・⑨が13工区Aからと3点、いづれも焼石に混じて出土している。

⑩は、長さ3.2cm、二等辺三角形の形容で基部は凹型、石材は詳らかでなく、突出した基部の片方は折損する。

⑪は、長さ1.6cm、⑩同様二等辺三角形に類する形状で基部は凹型、石材は黒曜石である。

⑫は、尖頭が欠損し推定長は1.9cm。⑩と同様二等辺三角形に類する。基部は凹型で石材は頁岩製である。

石錐は、12工区に1点、13工区Aに11点、13工区Bに3点と計15点が出土している。⑬～⑯は内12点を抽出したもので、他の3点も大差のない遺物である。

12点の石錐については、表6に法量等の計測表として示している。

以上、遺構と遺物について簡略に述べてきたが、遺構は、方形土坑・円形土坑並びに溝状遺構や柱穴が、調査地の略全域に検出されたものの、特に伴出した遺物を認めるにはいたらなかった。

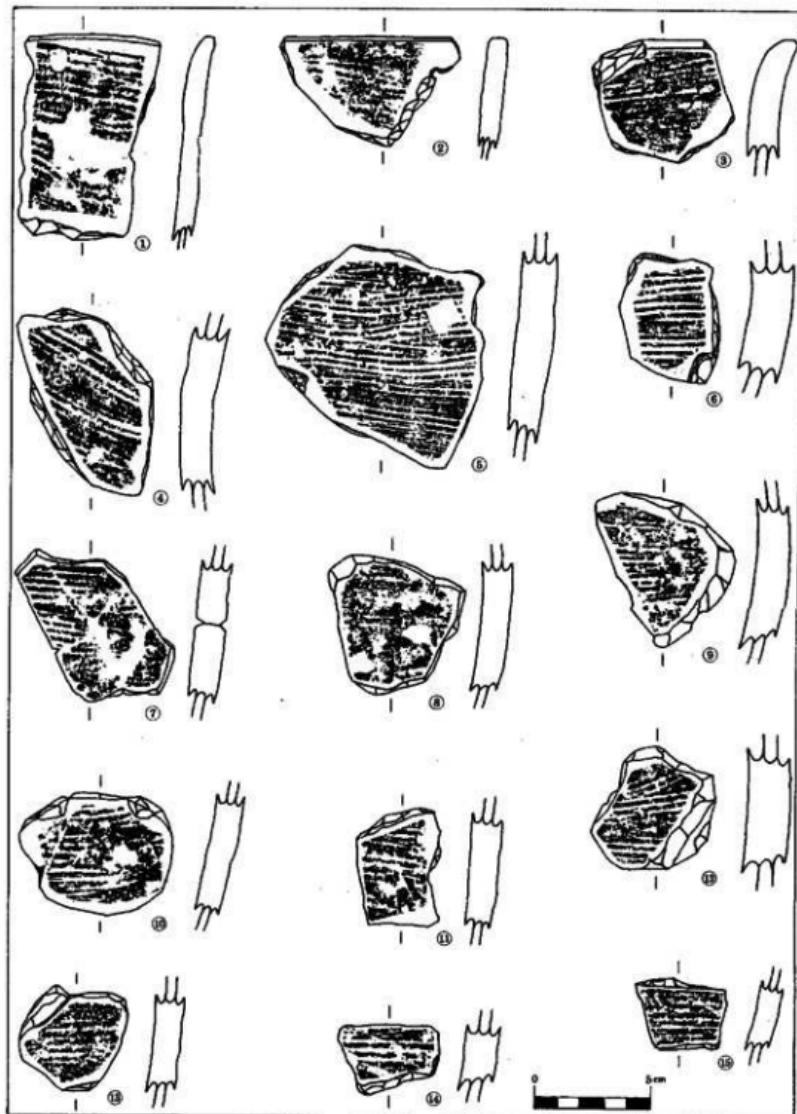
これらの中で、円形土坑の1号・2号は、西都原古墳群の消滅した古墳の周溝とも想定され、さらに方形土坑は、住居跡の一隅と考察されるが確認するにはいたらなかった。

遺物については、出土遺物総数 169 点中縄文土器が 126 点と主体をなすも、弥生土器が皆無、土師器・須恵器が極少という出土状況であった。

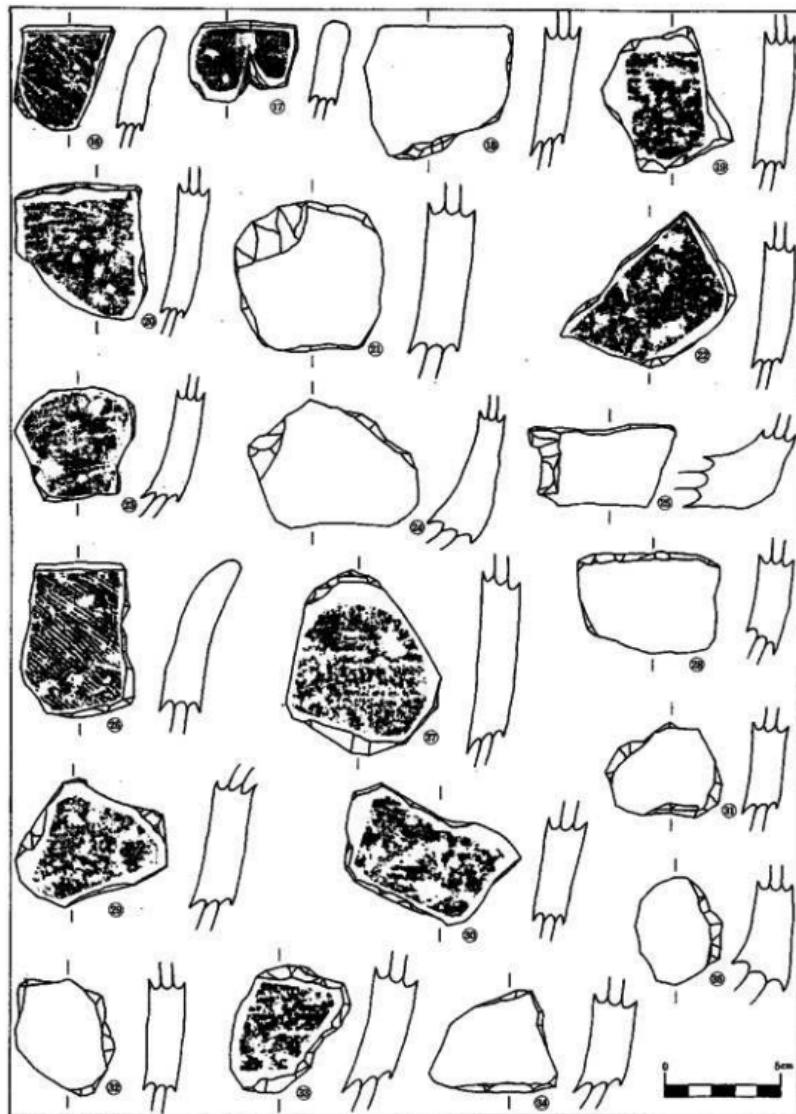
しかし、遺構の全容も確認されず、遺物も調査地に比しては極少であったといえるが、特筆するものとして、貝殻条痕文土器が出土したことは、西都原台地上に古墳群が形成される以前の集落形成究明に、今後の資料として提供され貢献するものと思われる。

さらに、本調査によって得た資料は、周辺地域の今後の調査時にも貴重な参考資料となる遺構と遺物であったということができる。

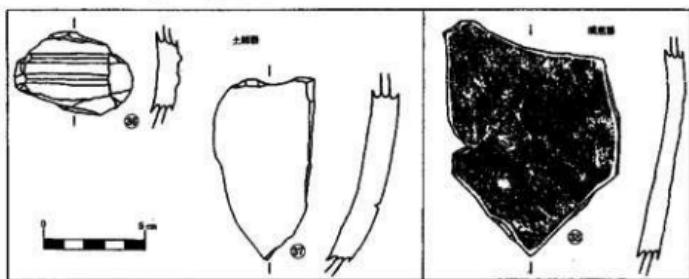
第9図 出土遺物実測図(縄文土器1)



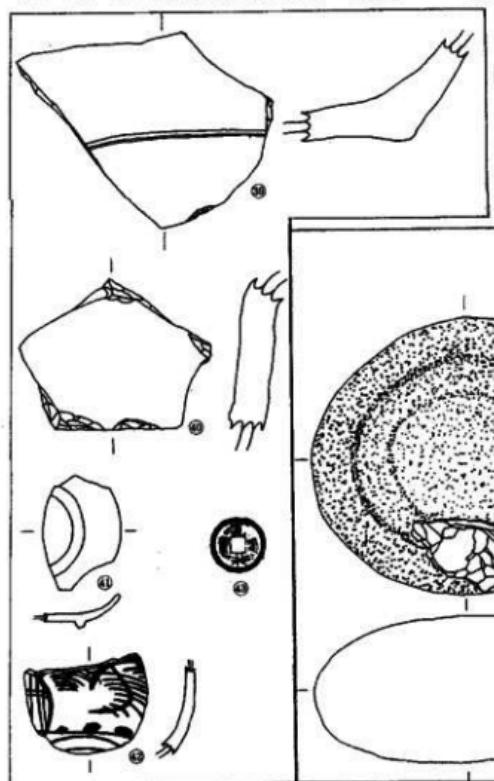
第9図 縄文土器(2)



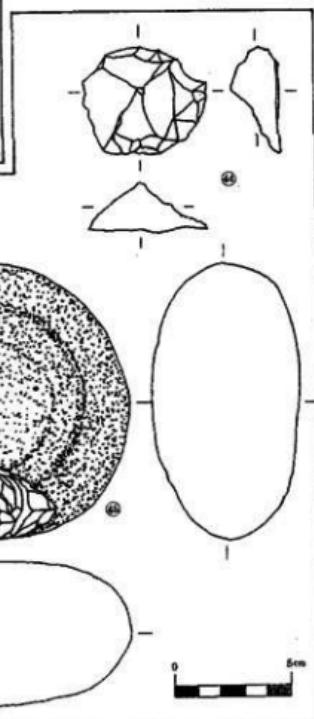
第10図 出土遺物実測図(土師器・須恵器)



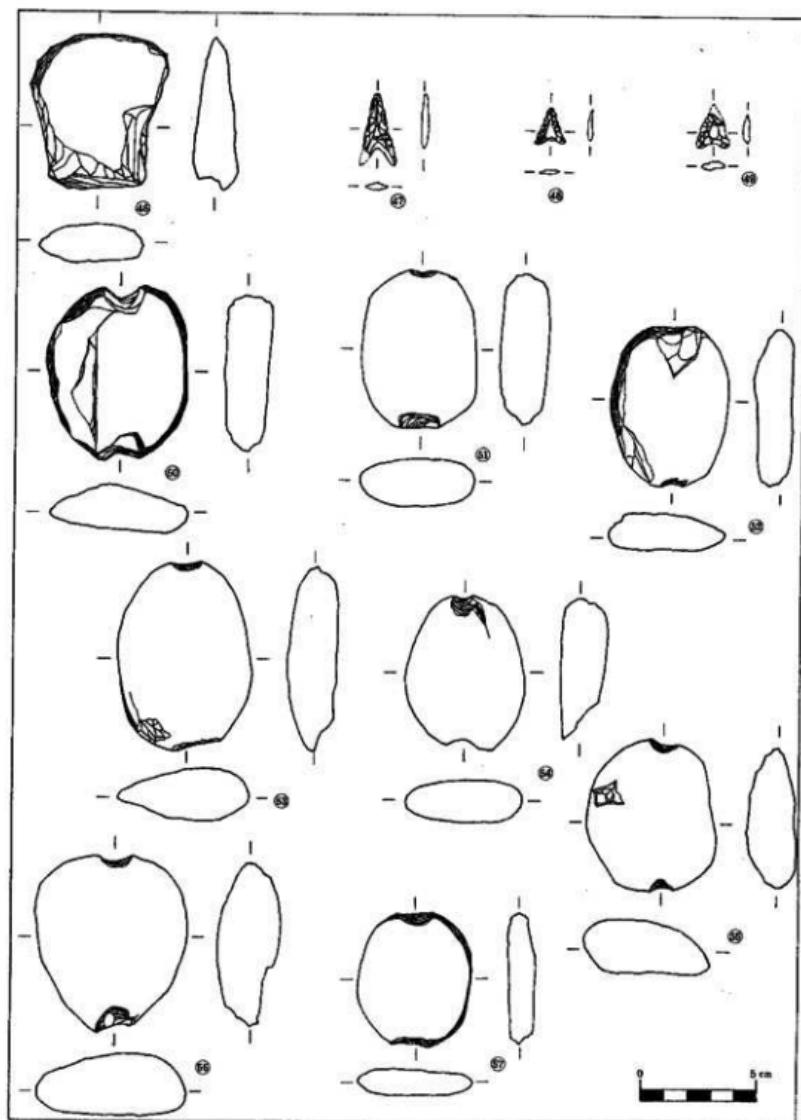
第11図 出土遺物実測図(陶磁器・古錢)



第12図 出土遺物実測図(石器1)



第12図 石 器(2)



第12図 石 器(3)

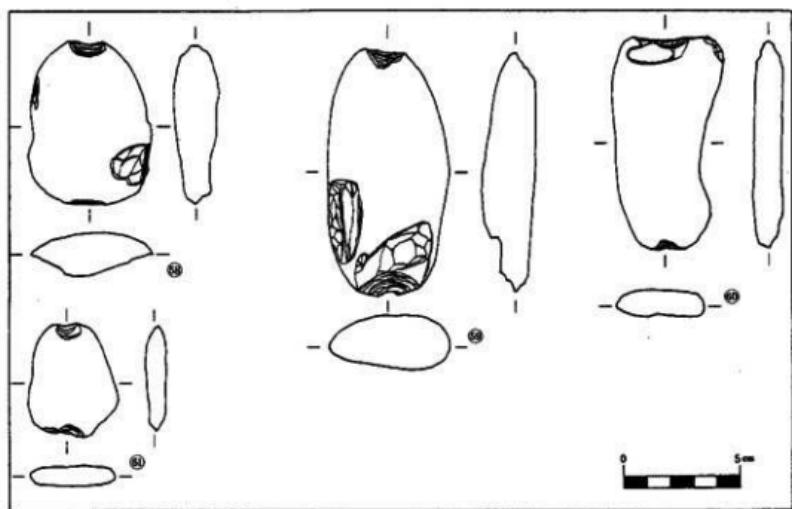


表1

出土遺物一覧表

出土地 遺物名	12工区	13工区A	13工区B	14工区A	14工区B	計	備考
縄文土器	70	54			2	126	貝殻条痕文 多し
土師器				3		3	
須恵器		2				2	
石斧		1				1	頭部片
石鎌	1	2				3	
蔽石	1					1	
剥片		1				1	
フレイク	10	2				12	
石錐	1	11	3			15	
染付		2				2	
陶器			2			2	
古銭					1	1	寛永通宝
計	83	75	5	3	3	169	

出土遺物計測表

表2

縄文土器計測表(1)

図 番 号	品種	法量	色 調	胎 土	焼 成	出土地	備 考
1	深鉢		外・明褐色 内・灰白	こまかい・雲母含む 1ミリ程の粒子	良 好	12工区	口縁部片・口縁近くに径 0.6センチの穿孔 貝殻条痕文
2	"		外・にぶい橙 内・橙	少し荒い・雲母含む 1~2ミリの粒子	良 好	"	口縁部片・貝殻条痕文 口縁近くに径0.5センチの孔
3	"		外・明褐色 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 小粒子	良 好	13工区A	口縁部片 貝殻条痕文
4	"		外・にぶい褐 内・にぶい橙	こまかい・雲母含む 小粒子	やゝ良好	12工区	胴部片 貝殻条痕文
5	"		外・浅黄橙 内・にぶい橙	こまかい・雲母含む 1~2ミリの粒子	良 好	"	胴部片・貝殻条痕文 外側の一部に煤付着
6	"		外・にぶい橙 内・灰白	こまかい・雲母含む 小粒子	良 好	"	胴部片 貝殻条痕文
7	"		外・にぶい橙 内・明褐色	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝ良好	13工区A	口縁近くの胴部片 貝殻条痕文
8	"		外・橙 内・褐灰	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝあまい	12工区	底部近くの胴部片 貝殻条痕文
9	"		外・にぶい橙 内・淡橙	荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝあまい	"	胴部片 貝殻条痕文
10	"		外・にぶい橙 内・黒褐	少し荒い・雲母含む 小粒子	やゝあまい	13工区A	同 上
11	"		外・橙 内・褐灰	こまかい・雲母含む 小粒子	やゝ良好	"	同 上
12	"		外・明赤褐 内・同	荒い・雲母含む 小粒子	やゝあまい	12工区	同 上
13	"		外・橙 内・明褐色	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝ良好	"	同 上
14	"		外・褐 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝ良好	13工区A	同 上
15	"		外・にぶい褐 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	良 好	"	同 上
16	"		外・灰褐 内・にぶい褐	こまかい・雲母含む 小粒子	良 好	12工区	口縁部片 貝殻条痕文
17	"		外・褐灰 内・にぶい橙	こまかい・雲母含む 小粒子	良 好	13工区A	口縁部片 風化し不鮮明の貝殻条痕文

図 数 量	器種	法量	色 調	胎 土	焼 成	出土地	備 考
18	深鉢		外・浅黄橙 内・明褐色	こまかい・雲母含む 小粒子	やゝあまい	12工区	胸部片 風化するも、かすかな条痕 又を有する
19	"		外・にぶい橙 内・同	少し荒い・雲母含む 小粒子	やゝあまい	13工区A	胸部片 不鮮明であるが条痕文あり
20	"		外・浅黄橙 内・褐灰	こまかい・雲母含む 小粒子	やゝ良好	12工区	胸部片 風化しているが貝殻条痕文
21	"		外・浅黄橙 内・明褐色	こまかい・雲母含む 小粒子	良 好	"	胸部片 無文
22	"		外・にぶい橙 内・浅黄橙	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝ良好	"	胸部片 かすかな条痕文を有する
23	"		外・橙 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 1~3ミリ粒子	やゝ良好	13工区A	底部近くの胸部片 風化するも条痕文を有する
24	"		外・にぶい橙 内・同	荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝあまい	"	底部近くの胸部片 風化の為表面が不鮮明
25	"		外・浅黄橙 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 小粒子	やゝあまい	"	底部片 表面(外側)くすれている
26	"		外・にぶい橙 内・明褐色	少し荒い・雲母含む 1~4ミリ粒子	やゝ良好	"	口縁部片・内側色調一部に 橙貝殻条痕文
27	"		外・橙 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 1~3ミリ粒子	やゝあまい	12工区	胸部片・貝殻条痕文が風化 し鮮明でない
28	"		外・黄橙 内・明褐色	こまかい・雲母含む 小粒子	やゝ良好	"	口縁近くの胸部片 外面風化、内面ナデ
29	"		外・にぶい橙 内・同	あらい・雲母含む 1~2ミリ粒子	やゝあまい	"	口縁近くの胸部片 条痕文がかすかに残存する
30	"		外・浅黄橙 内・同	少し荒い・雲母含む 小粒子	やゝあまい	"	胸部片 貝殻条痕文がわずかに残存する
31	"		外・橙 内・にぶい橙	少し荒い・雲母含む 1~2ミリ粒子	あ ま い	"	胸部片 条痕文が曇化の為鮮明でない
32	"		外・橙 内・明褐色	少し荒い 1~2ミリ粒子	あ ま い	"	胸部片 外面は風化して鮮明でない
33	"		外・にぶい橙 内・同	あらい 1~3ミリ粒子	あ ま い	13工区A	胸部片 条痕文がかすかに残存する
34	"		外・橙 内・にぶい橙	あらい 1~3ミリ粒子	あ ま い	12工区	胸部片(底部近く) 内外面風化し鮮明でない
35	"		外・橙 内・にぶい橙	あらい 1~3ミリ粒子	あ ま い	"	底部近くの胸部片 内外面とも風化

表3

土師器計測表

図番号	器種	法量	色調	胎土	焼成	出土地	備考
36	甕		外・橙 内・浅黄橙	あらい 1~3ミリ粒子	あまい	14工区A	脚部片・2条の突帯をめぐらす 内外面とも回転ナデと思考
37	"		外・明褐 内・橙	あらい 1~3ミリ粒子	やゝあまい	"	底部近くの脚部片 内外面風化し粒子が浮上

表4

須恵器計測表

図番号	器種	法量	色調	胎土	焼成	出土地	備考
38			外・暗灰黄 内・同	こまかい 良質・1~3ミリ粒子	良好	13工区A	脚部片 内外面ともハケナデ調整

表5

陶磁器計測表

図番号	種別	品種	出土地	備考
39	陶器	壺(推)	13工区B	底部片・底面は内湾して浮上し、端部は急曲して内湾気味に立ち上がる。外面にオリーブ黒の釉をかける。
40	"	甕(推)	"	脚部片・胴は内湾して立ち上がり、上端は急に外反してクビレ部となる。外面淡黄・内面褐色の釉をかける。
41	染付	皿	13工区A	口縁から高台までを残す片、胴は内湾して立ち上がり、徐々に薄くなる。内面は横・斜面の染
42	"	碗	"	脚部片・胴は内湾して立ち上がり上端がわずかに外反気味 肥前染付

表6 石錐計測表

単位：センチメートル

図番号	材質	長軸径	短軸径	厚さ	備考
50	頁岩	7.5	6.1	2.0	下面は略水平、表面は縱に1条の稜を有し、断面は三角形状
51	砂岩	6.2	5.0	2.1	カガリ部の打ち欠きが少ない
52	頁岩	7.0	5.1	1.7	片方の打ち欠きが少ない
53	"	8.1	5.4	2.2	下面の端部が欠損する
54	"	6.2	5.2	2.0	下面端部が大きく欠損する
55	"	6.4	5.4	2.4	片方の打ち欠きが小さい
56	"	7.7	6.6	2.6	下面の一部が欠損する
57	砂岩	5.8	5.9	1.2	下面の一部が欠損する
58	頁岩	7.1	5.3	1.8	下面は打ち欠いで調整される 片方の打ち欠きが少ない
59	砂岩	4.8	3.9	0.9	出土中最小のもの
60	頁岩	10.4	5.2	2.3	表面に2ヶ所の欠損部がある
61	砂岩	7.0	5.5	1.3	概略くの字型の形容

ま　と　め

このたび実施した丸山遺跡の発掘調査は、西都平野を流れる一つ瀬川の水を西都原台地に揚水し、畑作営農の近代化を図るために、送水管の埋設に伴った事前調査であった。

しかし、調査の主眼地域は、丘陵台地の縁辺部に位置する12工区及び13工区A調査地で、遺構の検出はやゝ期待に反する面もあったが、遺物として、縄文時代早期の貝殻条痕文を有する前平式土器が発見されたことは注目すべきことである。

発掘調査のすんでいない西都市では、縄文土器片が各所の洪積層台地上から散見されるが、縄文時代の遺跡等として確認された例は極めて少ない。

西都原台地からは、過去に縄文早期の原口遺跡が検出されている。この遺跡は、丸山遺跡12工区調査地から、同一台地の縁辺に沿って、南に約1.500m程しか離れていない位置にある。

調査は、昭和32年5月に実施され、縄文時代早期の単独遺跡として、貝殻条痕文を有する縄文土器や石器等が出土している。

丸山遺跡の調査で、検出した遺跡に興味をそぞろのが円形土坑の1号・2号である。この遺跡は、西都原古墳群の北端第136号から約20mしか離れていない近接地に在り、1号の推定径が約30m、2号の推定径が約25m前後の円形状となり、遺物が伴出しないことから推論となるが、古墳の周溝と考察することもできる。

また、1号・2号の遺構間が約1mと非常に近接することから、他にもこの周辺に古墳が群集していたと想像され、今後の調査を期待するところが大である。

遺構はすべて第Ⅲ層に検出されているが、さらに約25~30cm掘り下げた層位に、12工区及び13工区Aの東辺に集中して焼石が多量に検出された。

この層位からは、遺構の検出及び確認はされなかったが、原口遺跡と同様貝殻条痕文を有する縄文土器片が散乱する焼石に混じて126点出土した。

この数量は、本調査に於ける出土遺物数が169点で、主体をなすものが縄文土器ということになる。

皆無の弥生土器については13工区A調査地の南へ約50mの位置に、10数年前畑作中に同時代の壺が出土し、住居跡に伴う遺物としてこのたびの調査では、弥生時代の遺構と遺物出土を大きく期待したものであった。

土師器についても極少の3点、西都原の中心地男狹穂塚の後方周庭帯近くから出土しているだけ、さらに須恵器についても2点と、調査地に比して非常に少なく、皆無といってよい程の点数であった。

陶器及び古錢については、陶器2点、染付2点、古錢1点が出土しているが、これらは人の移動や耕作肥料等に混じて流入した遺物と考察される。

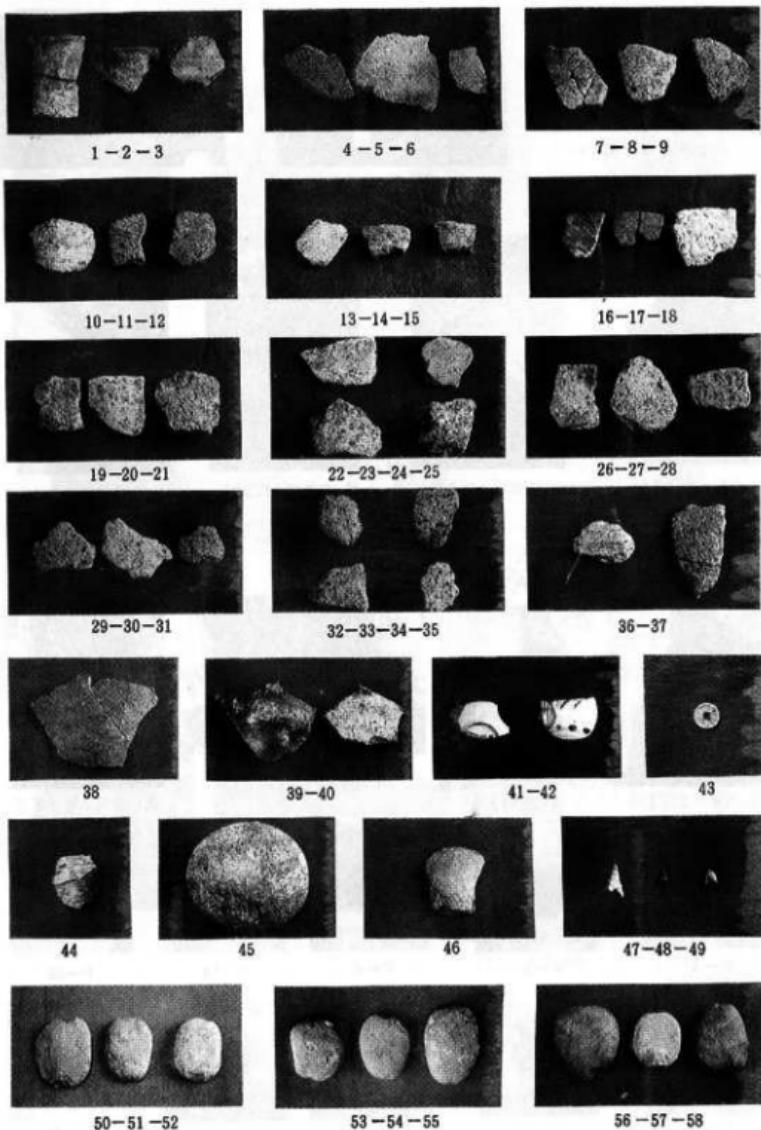
また、完形石錐3点を含む石器の出土については、石錐の出土層が不安定で、他は第V層上の焼石に混じ、縄文土器とともに出土している。

本調査が終り、遺物の総数は極少であったが、縄文時代早期の遺物が大半を占めていることは特に注目すべきことであり、今後とも丸山遺跡を含めた西都原台地の探査を進めなければならないし、縄文時代の西都原とその周辺に関しての今後の調査資料として、原口遺跡と同様大きく貢献するものと思われる。



圖 版

図版1 出土遺物



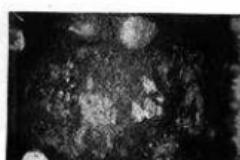
図版 2



出土遺物 59-60-61



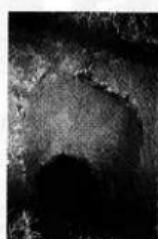
遺物の出土状況



遺物の出土状況



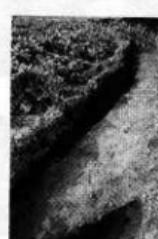
方形状土抗 1号



方形状土抗 2号



方形状土抗 3号



円形状土抗 2号



方形状土抗 1号



溝状遺構 2号



溝状遺構 5号



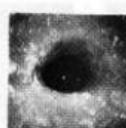
溝状遺構 7号・8号



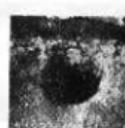
P-4



P-5



P-6



P-14



P-15



P-16



P-18



P-19



P-30



P-32

図版3



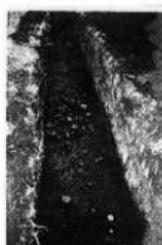
12工区調査地



12工区調査地



13工区A調査地



13工区A調査地



調査地東辺地



13工区A最終地



13工区B調査地



13工区C調査地



14工区A調査地



14工区A調査地



14工区B調査地

西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

発行年月日 平成2年3月30日

編 集 西都原古墳研究所

発 行 西都市教育委員会

印 刷 吉永印刷
